



TITLE:

<批評・紹介>曾我部静雄著「律令を中心とした日中関係史の研究」

AUTHOR(S):

濱口, 重國

CITATION:

濱口, 重國. <批評・紹介>曾我部静雄著「律令を中心とした日中関係史の研究」. 東洋史研究 1968, 27(1): 104-111

ISSUE DATE:

1968-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152758>

RIGHT:

律令を中心とした日中關係史の研究

曾我部靜雄著

昭和四十三年一月 吉川弘文館發行
A5判 本文 六四〇頁 索引 七頁

昭和四十年三月、東北大學記念資料室が曾我部靜雄教授の御退官に際して編集した著作目録によると、博士が昭和二年京都大學を御卒業後この年までに發表された學術論文は一百八十の多きに達し、著書も戦前戦後を通じて「鹽鐵論譯注」、「開封と杭州」、「宋代財政史」、「支那政治習俗論考」、「日本金貨幣交流史」、「紙幣發達史」、「均田法とその稅役制度」、「中國及び古代日本における鄉村形態の變遷」、「日中律令論」の都合九篇に上っており、研究の分野は舊中國の先秦・秦漢・魏晉南北朝・隋唐宋あたりまでの財政經濟社會史から制度律令史の方面に亘って頗る廣範圍であるだけでなく、我が國の大化改新とその前後の制度組織にまで及んでいる。このことは博士が、學窓を出られてからの三十有九年の歲月を如何に眞摯にして不斷なる研鑽の日々をもつて填め盡されたかを目のあたり示すものであつて、斯學への御貢獻の高大さと同輩後進者への裨益の甚大さが思顧されて、何人も敬意と感謝の念を表さざるを得ないのであり、博士が内藤虎次郎先生・桑原隲藏先生の大正末昭和初以來の高弟として盛名を謳われるのも宜なる哉と思うのである。

曾我部博士が、このたび十冊目の著書として學界に贈られた「律令を中心とした日中關係史の研究」は、先に公刊された「均田法とその稅役制度」から次第に進展してきたものであり、「日中律令

論」よりすれば此處での御講説に對する考證篇であるといつてよく、また「中國及び古代日本における鄉村形態の變遷」からいうと姉妹篇でもある。そこで新著を紹介する便宜上各章節の論題を錄しておくと、第一章「力役制度における日中關係」は、周禮の施舍制度とその日唐に及ぼした影響、2 什丁と采女と女丁の源流、3 日唐の儻人制度、4 我が古代の雜任と雜色人と入色者について、5 日唐の殘疾者に對する力役制度の各節より成り、第二章「官僚制度における日中關係」は、1 中國の品階制度と我が位階制度、2 日唐の番官と品官、3 兩魏北周隋唐の勳官勳級と我が勳位について、4 左遷と左右大臣、5 中國中世の官賤民と我が雜戶と品部、6 日唐の地方行政の監察制度の各節より成り、第三章「兵役制度における日中關係」は、1 日唐の衛士、2 日唐の防人の各節より成り、第四章「戶籍制度における日中關係」は、1 西涼及び兩魏の戶籍と我が古代戶籍との關係、2 日中の律令時代の戶の等級制、3 日唐の律令における課口對不課口の比率、4 日中の蔭附戶の各節より成り、第五章「京師畿内制度における日中關係」は、1 我が律令時代の京師における雇役と雜徭、2 日中の畿内制度の各節より成り、第六章「土地租稅制度における日中關係」は、1 孟子の稱貸と隋唐及び我が國の出舉、2 我が大寶及び養老の令制による義倉の貯藏穀について、3 均田法及び班田收授法の公田と私田と官田の各節より成り、第七章「民間習俗における日中關係」は、1 日中の同姓不婚について、2 我が古代における村と神社との關係、3 日唐の鄉飲酒の禮と貴族政治、4 奈良朝孝謙天皇時代の詔敕、5 明太祖六諭の傳承についての各節より成り、第八章「二人の律令家、穴太博士と藤田幽谷」は、1 穴太博士の調と課役の解釋、2 律令家としての藤田幽谷の各節より成っている。

右の目次を通観して判るように博士はこの新著において、唐およびそれ以前における官廳の雜任級のものと、官廳や官人に配されて維多な役務に當たるものと、一般的官労働や兵役邊戌に服するものなどの身分階級・出身地域その他のことを、我が大寶養老令ならびに遡った時代のそれに比較して論ずる傍ら、かかる研究を推進する場合の基本となるところの彼我の官吏組織・戸籍法・身分法等についての異同をも解明して、中國の諸制度が何時頃から如何なる様相で我が國に受け入れられたかを闡明することに主眼をおかれ、かねて儀禮田制の面にも言及されてあるのであって、正に表題通りの内容となっている。言うまでもないことながら、日中間のこうした關係を説き明すには先ずもって中國側の組織制度について豊富なる知見を有すること、またそれらを貫いている周禮等の古典に精しいことが要請される外、我が往古の制度歴史にも通曉していることが必要となるが、現實にこの三者を一身に兼ね備えるという段になると容易でなく、初學や局外者の想像する幾層倍もの困難を伴うのであり、これまでに博士の嘗められた辛苦は、漢唐の制度の研究に若干經驗のある私には判り過ぎるくらい判るのである。

抑々今日では唐宋以前に關する論文著書の類は數え切れないほどの積み重ねが出来ていて、それから受ける恩恵が恩恵と感じられないまでに成っているけれども、曾我部博士が學窓を巢立たれた大正末昭和初は大分様子が違うのである。無論その頃も市村瓊次郎先生、内藤虎次郎先生、桑原隲藏先生を始め、藤田豐八・加藤繁・岡崎文夫・那波利貞博士その他の碩學大家がならび存せられて（中國史以外は省いて）中國史研究上に一時期を劃したと言つてよく、後年曾我部博士が専攻された分野についても、既に幾多貴重な成果が

擧げられていたことは人の記憶にまだ新しいところであり、那波先生に至っては今なお矍鑠として尊い研鑽をお續けになっているのである。然しながら矢張り後から觀ると當時は我が國の中國史研究が學として獨立するまでの謂わば苦難期に在ったことは疑いないのであり、それが現在の進歩を來たしたわけは、上記碩學大家の休みなき建設への御努力が重ねられた一方、門人達が先師の偉業を繼受し發展せしむべくひたむきな精進を開始した結果であるのは贅言するまでもない。このことにつけても想い出されるのは若い時分の曾我部博士である。私は仙臺の東北學院に在職すること満七年、博士と勤務先は違つても住居はつい目と鼻のところにて朝夕御厚誼に預つたのであるが、博士は朝九時になると大學の研究室へ歩を運ばれ、正午には必ずお宅へ、そして一時に再び研究室に入られて夕刻まで御勉強であり、もし疲れを覺えたと豫め御持參の茶器と上質の玉露を自ら取り出してやお召し上るのである。このことは日曜以外毎日同じで、まるで話に聴くカントの如く規則正しく繰返えされていて私をひどく驚かせたものであるが、それから三十年経つた一昨年仙臺より甲府へ見えた知人から、こうした日常は御退官の年まで遂に變わりなかつたと聞かされて二度びっくりしたのである。思うに人々が己が専門に精魂を傾けるのは至極當然で、私が知っている限りでも數名の人があり、方法はそれぞれ違つても實質は同じなのである。が然しそうした人は結局數少なくなるのであって、生れながらの資質に加うるに並はずれた根氣があつて始めてやり通せるのである。

次に古典に通曉するというに關して若干述べておこう。東大の東洋史學科が漢學と縁を切つたのは昭和初期のことである。こと

茲に到るまでには色々な原因があつたのであろうが、近因は市村先生が既に教壇を退いておられたところへ、思いがけず藤田先生（先生も亦漢學に造詣深い方であつた）が早くお亡くなりになったことに在る。然も幸か不幸か昭和三・四年から唯物史觀らしいものが入つてきて、それが唐宋を中心とした經濟史・社會史への若いものの憧れと混ざり合つた上、更に當時の日本の一般的政治情勢に對する反感心とも絡み合つた結果、中國の古典を輕視する傾向が一層助長されたのである。尤も自己の當面する研究課題に關係があつて餘儀なく古典を垣間見るといふことはあつたけれども、古典を古典として眞に讀むという風は最早地を拂つて失せ去つたのであり、例外的存在として市村先生の後を受けて中國思想史を專攻された板野長八現廣島大學教授や、關西に居を移して京都の學風を受けるに至つた一・二人の人数えるに過ぎない。而して敗戦後の東大系の動向は既に讀者各位が御存知の通りで説明を要しないが、細かくみると少しばかり變つた様子が見えないでもない。というのは唯物史觀にやや味氣なさを感じ始めた折柄、戦後目覺ましく日本の所謂知識層に紹介されたマックス・ウェーバーの諸著作や歐米輓近の思潮からの影響が漸く現われて、中國古典を顧みようとする風がここ十年來漠然ながら東大の東洋史系にも出てきたことである。然しこの反省が果して着實な効果を擧げるかどうか、それはすべて將來にかかのである。従つて東大系は過去三四十年間京都の東洋史學系とは可成違つた道を辿つたと言つてよいのである。

私がこのような回顧談をするのは、曾我部博士の新著の第一章第二節三における正卒・更卒の條、同章第三節における南北朝期の各種像人の系統付けの條、第五章第二節の中國畿内制の條等での論議

の仕方、及び新著以外の論考、中でも唐の田制とその由來に關する考説を拜見して、周禮その他の古典を讀めと瀕に仰る博士の言葉の正當性が今更の如く身に沁みてくるからである。蓋し古典についての眞の知識がなくては先秦時代は勿論、秦漢以後の諸々の歴史事象についての理解力も缺くのである。まして古典、就中周禮等の影響を最も強く受けたと稱せられる漢唐の間の國家的機構や組織制度を研究しようとするものが古典を知らないでいては、到底生きた歴史を敘述することはならず、せいぜい斷代史的研究もしくは個々の事項の考證に終始し、借りものの史觀と方法以外の何物も持ち得なくなるのは當然である。そしてこのことは、私一個の研究歴からだけでなく東大系中國史これまでの狀態に省みて全くそう思うのであり、西と東の學風の長短が痛感される所以である。

次に我が國の大寶養老令およびその前後の制度に通ずるといふことに就いてである。このことは國史のこの方面の専門家にはさして難事であるまいが、中國史を專攻するものに容易でないことは、恰も隋唐以前の中國の關係事項に通曉する國史の人々に求めるのと同斷である。然るに博士の新著の第一章第一節の我が國の仕丁・采女・女丁の條、同章第四節の我が國の雜任と雜色人の條、同章第五節の我が國の雜戶と品部の條、第三章第二節の我が國の防人の條、第四章第一節の我が國の古戶籍法の條などにおける縦横なる論説を拜見していると、これが中國史專攻者の手になるものかを疑うばかりである。と同時に唐以前の中國史の研究を進めるに當たり、日本側の古文獻からの資料の發掘とその利用ということが、どんなに必要となつてくるかを一つ一つの事柄に即して明示されるのであつて、このことは私共への最大なる教訓となるであらう。

勿論新著は、日中間に研究が及んでいるだけに、各部門毎の専門家から眺めると細部において勇み足や言い足りない點があつても止むを得ないであらう。例えば第一章第五節の「唐の殘疾者に對する力役制などがそれである。博士は茲で、我が賦役令が殘疾丁男を次丁として半役の義務者と規定しながら、同じ令内の舍人史生のところで「初位及殘疾並免徭役」と規定していることを以て、令條内の矛盾だと断定して、集解の「私家此六十一之次丁歟何」というが如き解釋を採用せられなかつたのであり、この點大いに同感するのである。然しながら博士が我が令制としては殘疾丁を半役とする條項の方が正しいという前提に立つて、唐律疏議「徒應役無兼丁」の條の疏議に「其殘疾既免丁役」とあるを、これは殘疾丁の役の義務が然らざる丁男と同量でないことを示したもの（つまり疏議の説明不足である）と解釋し、唐の殘疾丁も亦半役であつたと主張された點には異議なきを得ないなどである。私は先頃唐の賤民制度をやつていて、官賤民たる官戸・雜戸にして殘疾丁であるものは健康な丁男の半分の勞働量と定めてあつた事實を、同じ開元法で良人にして殘疾丁であるものは上引の疏議でも知られるように役の全免となつてゐることと、老幼・病疾・婦女の扱ひは良賤の別なく同じ法規の下において保護するという中國法の一般の仕方とに照し合せみて、或は、良人にして殘疾丁たるものを半分の正役と定めた時期が遙か前にあつたのではないかを疑つたことがある。ところで敍上の疑念を、博士が新著において説き明かしていただけるように大寶養老令の中に大化改新前に傳承された中國法に由來するものが可成見出せることを、殘疾丁と役の關係規定に矛盾する條項の併存すること

り、唐は武徳の初期、隋の開皇令に據ることが多く、それが何回かの改正を経て高宗の永徽令となつた事實とも照し合せると、案外次の如きを憶測し得るのであるまいか。すなわち中國側では從前殘疾丁男を半役と定めたが、後ち恐らく永徽令から全役免除に改正したのであらう、一方我が國に最初に入つたのはこの中の古い方の規定であり、然も悪いことには大寶令作成前に中國側に改正があつた結果、永徽令を手本にして新令を造る際、殘疾丁を次丁と定めて半役としていた前からの規定に必要な修正を加うべきを失念したまま、別のところで殘疾を徭役免除とする旨の規定を置いたことが、我が賦役令の中に矛盾する條項を残すに至つた原因ではないであらうか、と。念のため附言するが、法令集を編纂するといつても今までも何も無かつたところへ全く新に作るという場合より、既に何がしかの規定集があつて其れに補修を加えて行くという場合の方が多く、我が令制もそれに近かつたと察せられるから、舊規の訂正をやつて残すといった現象が起らないとは限らないのである。現在私共の見る唐律疏議は仁井田陞・牧野巽兩博士が立證された如く開元二十五年律の疏議であり、凡ゆる點が同年の律令その他の制度に合致するようにして疏議されてあるとはいへ、矢張り落度の存在を免れなかつたのである。例えば上中下三級の折衝府の校尉數、従つて一府の兵員數に垂拱中改正が行なわれたにも拘らず、開元二十五年律の疏議が以前の疏議に訂正を加えるのを忘れてゐるなどその明證である。こういう次第であるから、何年度の法制書だといつても遺忘が全然ないとは斷言し難わぬのである。以上は私一人の見解で真相は今後の研究に待つとしても、かかる試論をなし得るのは、我が令制と其の來由についての博士の懇切なる説明と舊見に捉えられざる批

判の賜なのである。元來日本側の文獻について甚だ無案内な私共は、我が令制の注釋家がややもすると各條文を令制内で巧みに解釋する、その當り障りない説明に當惑させられるあまり、日本側の文獻に對する一種の忌避感に襲われ勝ちなのであるが、博士の論著出ずるに及んでそうした觀念から一時に解放される思いだと言つて必ずしも過言でなく、この點から受ける恩恵だけでも測り知れないものがある。

立戻つて新著の究極の目的が、本朝の遅くも仁德天皇頃から中國の制度組織の遙かなる影響を受けつつ（博士は遡つて成務天皇頃からの影響も考えておられる）、徐々に國造りの基礎を固めてきたことを如實に示すとともに、大寶養老令と唐令を比較して我が國の攝取の仕方を論明するに在るのは最早や繰返して言うまでもないが、往昔の日の中國關係について先人大家の論考が數ある中で、我が國家機構の來由を博士の如く廣範圍について詳密に論じた人は未だ嘗て無いのであり、この新著は先の「中國及び我が國古代における鄉村形態の變遷」と「日中律令論」と相俟つて、日中關係史上の不朽の名篇と評して決して溢美の言ではない。仄聞するに、さきほど中華民國學術院から博士を同院最高の榮譽に輝く哲士 Academician に推舉したい旨の傳達があつたという。このことは彼の國の學者が博士の數々の業績に對して如何に深甚なる敬意を表しているかを端的に示すものであつて、國境を超えた學問世界の盛事と稱すべきである。

私が博士から新著の寄贈を受けたのは去る一月の末であつた。而して本書に收録されてある論考は以前抜刷として頂戴したものが大部分であるけれども、それが斯様な巨冊として纏められたのを機會

に再讀して一層の恩恵に預りたいと思ひ、失禮ながら病床に横たわつたままで拜見し始めたところ、讀み進むにつれて次第に新たなる感銘が湧き起つて何時しか机に向うことになつたばかりか、この度の新著は何か何でも私の手で御紹介申し上げたいとの思いが募り、到々本誌の編集委員會にその由を告げてお許しを願うまでになつたのである。無論自分で言い出しただけに責任が重いので繰返し丁寧に讀んで、章節毎に論旨と評語を書き記したのである。然るに論題が多方面に亘っている上に日中雙方に跨つてゐるので、順を逐つて紹介するという普通の形式を採つたのでは草稿が無暗に長くなり、と言つて簡略にすれば殆ど紹介の用をなさなくなるのみか、新著の價值や眞意を誤り傳える憂いも出かねないことが判つたので、御覽の如く新著の持つ大きな意義と教訓に重點をおいて述べることにした次第である。

委員會から指定された原稿數が残り少なくなつたけれども、どなたが書評されるにしても觸れざるを得ない事柄の一つに「課役」問題がある。私は、以前唐の府兵制度の論文を發表した節、課役を租調役の義と解しておいたが、格別自信があつたわけではない。いや當時のことを述べてみると、課役の語の内容をしかと見定め得るような資料を探し出せないで苦慮した學句、こんなありふれた用語の意味が把めない自分自身がどうかしているのであつて、他の人々には既に判つているに違ひないと思へてきたのである。こんな風であつたから後ち唐の徭役勞働の論文を書く際、論議を進展させて行くには何處かで課役に對する自己の見解の根據を示しておかねば成らず、さりとてどうにか考へついたことを事新らしげに論文の本文の中で證明する氣にはなれず、結局註記するに止めたのである。

その後私の研究は廻った時代に移行し、更に敗戦數年前に大連へ去って行ったので課役のことは想い出す折もなくなったのであるが、大連から引揚げて、重い榮養失調も大分恢復したところになって改めて邊りを眺めてみると、課役の義に關して論戰が始つていたのである。然も忽の裡に誰彼となく論争の仲間入りされたので、本誌二〇ノ四で礪波護氏が「課と税に關する諸研究について」と題して展望してあるように、論争の範圍と程度は段々擴大し激化して最早や私の出る幕でなくなったのである。けれども元來事柄が自分に無縁でないの曾我部博士が次々に示される文獻について、竊に新解釋の正しいことを念じながら一々検討を加へ始めたのであり、それが一應終了したのは昭和三十五・六年の交である。ところが其の結果はどうであつたかという、如何せん私の不敏のせいであらうか、唐法上の課役に關しては敬愛して措かない博士の見解と違ふことに成つて了つたのであり、今はそのことを率直に申し上げて高批を乞ふ外ない。

結論から言うと、唐法上（慎重を期すれば永徽令以後）の課役なる用語は、租調役の三目を指して雜徭を含まないものである。従つて課役免除と規定されてあるものが其の上に雜徭の免除をも受けたかどうかは、その一つ一つについて調べなければならない。而して斯く結論するに至つた根據は、振り返つてみると、意外にも唐の徭役勞働の論文の註七と一五（秦漢隋唐史の研究五五二・三頁）でもつて大體盡きていたのである。けれども曾我部博士が引用された多數の文獻の中には、卑見を添えておきたいものが若干あるので以下それを記しておく。

最初に、博士が新著六五頁以下で引用された唐律疏議の條々であ

るが、それについては拙著「唐王朝の賤人制度」の一四七頁以下を参照されたい。また新著一六〇頁で引用された唐律疏議（宋刑統）の課調の義のことも拙著一七二頁に譲つておくが、ここの課調が租と調を徴することであつては唐法の用語としては些か妙な感じがするのであつて、この語の來由は改めて考究する要があるであらう。

次に新著五七頁以下で引用された魏志以下の諸文獻、則ち孝子順孫義夫節婦に與えた恩典についてである。魏志杜畿傳の「復徭役」と隋書食貨志の「免課役」が共に孝子達本人に與えた特典であるのは疑いない。けれども徭役＝課役と斷定するには餘りに時代的間隔がありすぎて、未だ何とも判斷し得ないのである。そこで其後の文獻であるが、六典戸部員外郎の「若孝子順孫義夫節婦、志行聞於鄉閭、州縣申省奏聞、表其門閭（孝子等を出した部落）、同籍（孝子等と同じ戸内のものというに近い）悉免課役、有精誠致應者、則加優賞焉」はこれと殆ど同じ條文が我が令制にあるから、少なくとも永徽以來この規定に變わりなかつたことが察知される。今こうした點を頭に入れた上、開元十一年玄宗が即位前の縁りの地太原へ行幸して管内に降した恩制の一節に「孝子順孫義夫節婦、旌表門閭、終身勿事」とあるのをみると、これは管内で孝子等を出した部落に對する旌表、そして孝子達本人とその同籍者に對する課役免除のことが既に法規通り實行されている其の上に、今度の行幸を機として現に孝子等を出している名譽の部落内の衆を特に「終身勿事」の扱いとする旨約束したものであるのが明白となる。而してこのことは、高宗弘道元年の詔「孝子順孫義夫節婦、表其門閭、終身勿事」についても同じであるのは言を俟たない。果たしてそうだとすると魏志以下に見えた復徭役、免課役、終身勿事、免課役なる恩典を與えられ

たものは或る時は孝子達本人であり、或る時は孝子等を出した部落内の人々であり、また或る時は孝子達本人とその家族であるという具合に同異が存し、かつ時代の違いもあるのであるから、これらの文獻を一括的に扱って徭役即永徽令後の課役という結論を出すのは方法的に誤りとなるであらう。

次に新著五三頁で引用された舊唐書高祖本紀武德二年二月丙戌の「詔天下諸宗無職任者、不在徭役之限」である。開元法では李唐の宗籍に屬する一切の人が課役免除となっていたのであるから、このことを武德の詔に考え合せると課役免除とは徭役免除の謂だとの推測を下し得ないでもない。然し武德二年といえば洛陽方面で隋の命脈は依然保たれており、何人が中原の鹿を獲得するか尙混沌としていた時である。従つて李唐としては、各地に散在する己が宗族にして父・祖とも未だ唐の官職爵位勳等を受けておらず、勿論従前から隋朝のそれも受けたことのないような連中、つまりどちらから見ても一介の庶民に過ぎない者に對して、取り急ぎ何がしかの特權を附與して自族の結束を固くする必要があり、さてこそ斯々の詔を下すに至つたものと解することが十分可能であるから——案外それは隋が自己の宗族に對して與えていた恩典の踏襲かも知れない——武德の詔に言うところの「不在徭役之限」が、開元法上の課役免除と全く同じ意味内容のものであつたとは斷定しかねるのである。終りに新著五四頁に引用されてある舊唐書白履忠傳である。これは開元十七年頃、白履忠という隱逸の士が從五品下の文散官である朝散大夫の位を授けられて郷里に戻る時、同郷人に向つて「且是吾家終身高臥、免徭役、豈易得也」とざれごとを言つたという話なのであるが、文散官でも五品以上になると本人は元より同居の期親までのも

のが課役免除の特典を持つたのであるから、彼此照合して免徭役すなわち免課役であつたとの解答が出て不思議はない。私が課役の語に検討を加えていて扱いに尤も困つたのはこの一條であつた。そこで様々考えた末、思いついたことを述べてみると次の如くである。

賦役の四目の中で重いのは力役一般であり、かつ留役規定があつて一層苦しいものにしたのである。こうした關係からであらうか、家口の登録漏れや戸の逃亡や蔭附、乃至は度牒を買うなど色々の不正手段で公課を免れるものの紛々からざるを論ずる場合、決つたやうに出てくるのは國の必要とする役・雜徭・雜役などに人を缺くという文句なのである。私はこうした點を考える傍ら、魏晉南北朝時代についての曾我部博士の新舊の諸論考を拜見して、力役一般の免除ということが何がしかの特權の保持者に取つての基礎的なものであつた時期があり、従つて特權の保有を言う場合、標識的に力役免除のことを言う風が醸成されていたのではないかと推測するのであつて、白履忠の言葉もその類ではないかと思うのである。甚だ回りくどい解釋になつたが、履忠傳を根據として課役即徭役だと言ひ切れないのは確かである。唐法上の課役の義についての論議が長くなり、書評の常の態から逸脱したことを深くお詫びしなければならぬが、不敏を省みないで敢て記した理由は、そうすることが可能であれば、これを機會に課役のことを當分博士と私の間の論題として留め置いて引き續き高教を得たいと思うからであつて、それが私の切なる願ひでもある。

以上をもつて新著の紹介と批評の筆を擱くことにするが、私は博士が日中關係研究上に三度まであげられた御業績を讚美すると共に、本書の持つ貴重な意義教訓を讀者各位が一段と確實に感得して

自己の研究に生かして行かれるよう望むのである。終りに博士が益々御健康で、何時までも學界の巨星として我等を導かれんことを祈りかつ希うて已まない。

註一、唐初の殘疾については新著一五八頁十二行の賈公彥疏も參看。

註二、「均田法とその税役制度」二七九頁六行に引用された玄宗の制の「賦租課役」は、言葉であつて法的用語ではない。

(一九六八・三・二〇 濱口重國)

内陸アジア遊牧民社會の研究

後藤 富男 著

昭和四十三年三月 吉川弘文館發行
A5判 四三二頁

畏友後藤富男氏の力作、内陸アジア遊牧民社會の研究が刊行されたが、この雄篇の全貌を盡すことは到底不可能であるので、その一斑について紹介の文をよせたい。

本書では内陸アジアの遊牧民社會について、遊牧論(第一章)、牧畜技術の傳統(第二章)、牧畜労働(第三章)、家畜財産(第四章)、牧地―その所有關係、社會集團(第五章)、漢人商賈(第六章)等を記述の對象としている。

第一章では、水草を追つて遊牧する一見原始的な生活が、實は家畜の馴致、去勢、計畫的移动等をなして始めて可能であることを明

らかにしている。

第二章では、五畜(羊・山羊・牛・馬・駱駝)の放牧管理をそれぞれの家畜について述べ、これによつて各家畜の性質がよく理解されたと共に、家畜の組合せによる放牧がいかに大切であるかを知らる。家畜の年齢別名稱や家畜群の構成等にもみるように、實體調査による資料をよく収集して利用されてある。遊牧民の生活の基礎がすべて家畜によることは、我々も常に聞く所ではあるが、乳製品、毛氈、役畜等についてその製法や利用價值等を餘す所なく傳えている。ことに去勢馬が軍馬、役畜としていかに秀れているかをとき、古來遊牧民が北アジアに雄飛した事由がここにあることを示しているのは傾聴すべきことである。

第三章では、男女の分業成立の要因をのべ、ことに労働組織としてのサーハルタ、スルグの制度にふれているのが目につく。遊牧民の家畜管理をみると、例えば羊が五〇頭でも百頭でも、同じ一人の牧人が必要である。これをまとめて放牧すれば、人の努力はきわめて經濟的になる。いくつかのアイルが協力して、一人の力にする「協力の慣行」をサーハルタという。この慣行では代償としては餘り求められる所がなかったらしいが、とにかく獨立生産者相互の平等な協力關係であつた。サーハルタを形成するアイルの一團がホトンといわれる社會集團の單位である。もう一つのスルグは家畜を委託する制度で、その原因は種々あつたらしいし、また條件も様々であつた。これは本質的には富戸と貧戸との關係であつた。この小作關係にもたつた労働結合の研究は未だ不明の所が多いが、多くの史料を求めてこの重要な研究題目を提起されたことを特記せねばならぬ。

第四章家畜財産では、家族内における財産所有の實態、獨立生産